



Title	在日コリアンの心性に関する臨床心理学的研究：民族学校におけるスクールカウンセリング実践を軸にして
Author(s)	金沢, 晃
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/59329">https://hdl.handle.net/11094/59329</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【2】			
氏 名	かな	ざわ	あきら
	金	沢	晃
博士の専攻分野の名称	博 士（人間科学）		
学 位 記 番 号	第 2 4 8 7 2 号		
学 位 授 与 年 月 日	平成 23 年 9 月 20 日		
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
	人間科学研究科人間科学専攻		
学 位 論 文 名	在日コリアンの心性に関する臨床心理学的研究 —民族学校におけるスクールカウンセリング実践を軸にして—		
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 老松 克博 (副査) 教 授 井村 修 教 授 平沢 安政		

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、在日コリアンの心性と家族関係の特徴を解明することを目的としている。研究方法は、民族学校におけるスクールカウンセリング実践を軸にしており、それに加えて、民族活動団体におけるインタビュー調査、質問紙調査を行った。スクールカウンセリング実践を通して、在日コリアンの民族組織が果たしてきた役割も明らかとなった。それに加えて、民族学校におけるスクールカウンセリング実践の技法的検討も行った。

第1章では、民族学校で生じていた授業崩壊クラスへの観察的介入の実践を報告し、在日コリアンと民族学校の現状について考察した。そして、タピストック方式乳児観察のスクールカウンセリング場面に対する応用可能性について検討を行った。後者については、観察的介入が生徒集団にコンテインメントの経験を提供したことが明らかとなった。生徒集団との話し合いの機会を観察過程と並行して導入することが、生徒集団をコンテインする上で重要であった。観察を通して、授業崩壊という問題が、民族学校という組織が抱えている問題を反映していることも明らかとなった。しかしながら、このことは同時に観察的介入の難しさを示していた。つまり、問題解決には組織の問題に取り組むことが必要不可欠であるが、学校組織がスクールカウンセラーに望んでいるのはあくまで生徒集団の問題の解決であり、学校組織が組織の問題に立ち入ることを望んでいるかどうかは、慎重に判断する必要があるという難しさである。このことに加えて、スクールカウンセラーが生徒集団の問題にも組織の問題にも1人で同時にアプローチすることは、問題理解の上で重要な手掛かりとなる逆転移感情の把握を困難にするという限界点について議論を行った。一方で、前者については以下のことが明らかとなった。それは民族学校に通っている在日コリアンでさえ、現代の在日コリアン青年のアイデンティティはほとんど日本人と変わりが無いということであり、その意味で民族学校は存続の危機を迎えているということであった。これは換言すれば、民族学校が日本人との同化と民族的アイデンティティの喪失という痛みに向き合いながら、この現状といかに折り合いをつけるかという課題に直面していることを示していた。一方で民族学校は、養育上の問題を抱える家庭で育った在日コリアンに対して、家庭の機能を補う受容的な母性的関係を提供してきたことも明らかになった。筆者はこの民族学校の機能を＜拡大家族＞と概念化した。そしてこの＜拡大家族＞の機能が、今も昔も変わることなく民族学校が果たしてきた重要な役割であり、その点において民族学校は、在日コリアンにとって重要な存在意義があると結論づけた。

第2章では、民族学校でのスクールカウンセリングにおける、母親面接事例（在日コリアン二世、三世）を提示した。いずれの母親も幼少期に情緒的剥奪を経験していた。その結果として、コンテイナー／コンテインド関係の反転に代表される世代間境界の混乱が生じている点、情緒的剥奪が世代間伝達されている点が共通する特徴と

して見られた。世代間境界の混乱や世代間伝達の問題の背景には、母親の羨望の感情が存在していた。筆者は世代間境界の混乱、情緒的剥奪と羨望の問題を、在日コリアンの家族全般に存在する、非常に重要かつ厄介な問題であると考えた。そして、この問題が在日コリアンの家族に内在化され世代間伝達される要因は「日本社会にシステム化された差別」であるという仮説を立て、「日本社会においてシステム化された差別が、在日コリアンの家族内に剥奪と羨望の問題を内在化させ、剥奪し羨望する／剥奪され羨望される、という形で反復再演され、個人の内的世界に内在化される」と定式化した。システム化された差別のうち、特に在日コリアンに対する労働市場の閉鎖性と、日本人には与えられて在日コリアンには与えられないという差別化が、在日コリアンの家族に羨望と剥奪を内在化させる主要な要因として考えられた。こういった社会状況におかれた在日コリアンは、特に一世世代において、親族身内の支えがないという家族状況が加わり、子ども（二世世代）の情緒的要求に応えられないか、子どもにパートナーの役割を求めるようになって考えられた。また、在日コリアンの家族は、剥奪の痛みから身を守るという防衛システムとして構築されるリスクが高くなり、子どもの自立が親世代にとっては剥奪の再現として体験され、子どもの分離自立を促進するような関わりが困難になるという問題を抱えていると結論付けた。

第3章では、在日コリアン三世・四世の、思春期・青年期の子どもとのスクールカウンセリング過程（事例Sと事例T）を示し、第2章で指摘した世代間境界の混乱・剥奪と羨望の問題が子どもに与える影響について論じた。いずれの事例も、感情から切り離された、つかみどころがないという特徴をもった子どもたちであった。これは、言語的・非言語的コミュニケーションの問題を抱えているということの意味しており、その背景には、第2章で示した、コンティナー／コンテインド関係の反転に代表されるようなコンテインメントの失敗の影響が想定された。世代間境界の混乱の影響は特に事例Sに見られ、Sは両親の夫婦間の問題の責任を負っていた。一方で、羨望と剥奪の問題の影響は特に事例Tに見られた。それは、親密な関係から疎外されていることへの憎悪として表れ、またその憎悪がTを親密な関係から遠ざけ、それがTの疎外感を増幅させるという悪循環が見られた。民族学校におけるスクールカウンセリングにおいて、これらの問題に介入する上での技法的工夫として、民族学校の＜拡大家族＞機能を補強するという観点から、以下の3点を論じた。1点目は、コンテインメント経験が欠如し、感情から切り離された子どもとのセラピーにおいては、セラピストは内面に喚起される感情を保持する必要があるという点である。2点目は、世代間境界の混乱について、その混乱が学校スタッフ間で外在化される危険性があるため、スタッフ間で協働関係を構築することや親面接を導入することが必要不可欠であるという点である。3点目は、上記2点の取り組みが子どもの家族に世代間境界を確立することを意味しており、特に養育者からの自立が発達課題となる思春期・青年期の子どもには、子どもに投影されているものを母親へと引き戻すような介入が母親面接において必要となる点である。最後に、子どもの卒業までしかサービスが提供できないという時間的な制約のあるスクールカウンセリングでは、逆転移感情の十分な吟味という点、子どもに洞察と変化をもたらすという点、1人のスクールカウンセラーが母子両者の面接を行わざるを得ないという点において、ハンディキャップを抱えているという技法上の問題についても論じた。

第4章では、第2章で筆者が立てた仮説の検証を行った。つまり、スクールカウンセリング事例（臨床群）に見られた在日コリアン家族における剥奪と羨望の問題が、日本社会と在日コリアンとの関係性という社会的な要因から理解が可能であるかという点、健全群にも見られるかどうかという点について検証した。その方法として、民族活動団体と何らかの関わりをもつ4名の在日コリアン三世青年のインタビュー調査（4名）を考察した。その結果、4名のうち本名を名乗って生活していた2名は日常的な対人関係や、就職という社会的な関係においてあからさまな差別を受けていたことが明らかとなった。他2名も、親世代から差別を見聞きするという形で、拒絶的な日本社会のイメージを内在化していた。特に、調査対象者の親世代（在日コリアン二世世代）は、日常的な対人面においても社会的な面においても露骨な差別を受けていたことが明らかとなった。このことから、日本社会にはシステム化された差別が存在し、在日コリアンの家族に大きな爪あとを残していることが示唆された。その結果、在日コリアンの家族には「日本人に負けるな！」という競争的な雰囲気が生み出された。これは、在日コリアン二世世代がシステム化された差別との格闘と生き残りにこころが奪われて、そして差別によって受けてきたトラウマによって、子どものこころに目を向ける心理的余裕がなくなることの意味していた。これは、子どもたちにとってはある種の剥奪体験であり、日本社会によってないがしろにされた親世代が、子どもの気持ちをないがしろにするという点で、臨床群に見られたような剥奪感の世代間伝達の問題が健全群にも生じていると考えら

れた。それに加えて、親の恨みを子どもが晴らす／親のトラウマを子どもが解消するという、親の子どもに対する期待が、親子関係の特徴として見られた。このような関係性によって、調査対象者はいずれも「アイデンティティの危機」に直面していた。臨床群に見られた羨望の問題を示唆するような家族関係も見られた。しかし、臨床群と比べると、世代間伝達の問題が臨床群ほど大規模なものではなく、羨望に関しても臨床群ほどははっきりとは見られなかった。このことから、筆者が在日コリアンの家族の問題として仮説を立てた、世代間境界の問題と剥奪と羨望の問題は、臨床群にも健全群にも共通してみられるが、その程度は異なっていると結論づけた。また、健全群においては祖母などの拡大家族が養育者の機能を補っている点が特徴として見られた。そして筆者は、民族活動団体が、在日コリアンに対して受容という＜拡大家族＞の機能と＜社会との橋渡し＞という役割を果たしている点、在日コリアンの親子間における葛藤を社会的な形で表現する機会を提供している点について論じた。

第5章では、在日コリアン青年の親子関係の特徴と青年期危機との関連を明らかにするために、在日コリアンと日本人の中学生・高校生を対象に親子関係診断検査（FDT）と自我発達上の危機状態尺度（ECS）を実施し、差を検討した。その結果、中学生に関しては、在日コリアンは日本人に比べて、両親ともにしつけが厳しいと感じており、母親からは強い達成要求を感じていることが明らかとなった。また、在日コリアンにおいては、母親が夫である父親をパートナーとして見なしていないと感じていること、母子関係が臨床的問題を含んでいる可能性が有意に高いことも明らかとなった。厳しいしつけの背景には、朝鮮半島の儒教的家族関係の影響と、在日コリアンが日本社会で生きていく上でマイノリティという不利な立場におかれたために、家族間の結束を強めたことの相互作用が考えられた。在日コリアンが、母は父をパートナーとして見なしていないと感じている背景には、社会的経済的に成功することが困難な在日コリアン男性に対し、妻は否定的感情を抱きやすくなっている可能性が考えられた。この結果から、在日コリアンの家族内においては父親が嫌悪され母子が密着しやすいという世代間境界の曖昧さが見られ、それが母子関係における臨床的問題のリスクを高めているという仮説を筆者は立てたが、相関分析はこの仮説を支持しなかった。高校生に関しては、在日コリアンは日本人に比べて、母親はしつけが厳しいと感じていることが明らかとなった。中学生の在日コリアンに見られた結果とあわせて、特に母親のしつけの厳しさは在日コリアンの親子関係の特徴であると考えられた。また、在日コリアンは日本人に比べて情緒不安定であるという結果が得られた。この情緒不安定性と厳しいしつけには有意な相関が認められたため、在日コリアンの家族においては厳しいしつけが、親子間の葛藤が先鋭化する青年期に在日コリアンを情緒不安定にするリスクを高めている可能性が示唆された。また、在日コリアン男子は日本人男子に比べて同一性が拡散し、実行力が欠如しており、対人的過敏性が強いという結果が得られた。これらの結果と事例研究で得られた知見と照合してみると、中高生に見られたしつけの厳しさ、中学生に見られた達成要求の高さは、家庭内の競争的雰囲気と親のトラウマを解消する役割を期待されるという親子関係の特徴と一致すると考えられた。一般の在日コリアン家庭では、こういった親子関係が子どもに拒絶感を植えつけるほど深刻なものではないが、特に母親からのしつけが厳しいと子どもに感じられた場合には、両親との葛藤が尖鋭化し情緒不安定を引き起こすリスクが高くなると考えられた。最後に、本研究においては、データ数が十分であるとは言えない点、母集団に偏りがある点、縦断的調査ではないため中学生と高校生の結果を比較検討できないという限界があることを指摘した。

以上の調査結果を踏まえた上で、終章では在日コリアンの心性と家族関係の特徴とその特徴の背景を、在日コリアンが経験してきた差別と喪失という観点から以下のように定式化した。「日本社会においてシステム化された差別によって、日本社会でいかに生き残っていくかという課題に在日一世、二世世代は直面してきた。そういったストレス状況のもと、彼らは子どもの気持ちに目を向けるという物理的、心理的余裕が失いがちであった。父親／夫は社会経済的に家庭を支えることが困難で、家庭内では影が薄くなりがちである。こういったストレスや差別によって被ったトラウマを心理的に受け止めてくれる両親や祖父母を失った在日一世、二世世代は、子どもに親機能を求めることとなる。すなわち、家庭内には競争的な雰囲気がうまれ、親は、日本社会で経験してきたトラウマを子どもが解消してくれることを期待しがちになる。それは、子どもに対するしつけの厳しさや、達成要求の高さといった形で現れる。これは親子間役割の逆転であり、子どもは自分のアイデンティティを守ることや、独自のアイデンティティを確立することが困難となり、情緒不安定に陥りやすくなる。一方で、在日の非臨床群の家庭においては、この関係が子どもに拒絶感を植えつけるほど深刻なものではない範囲にとどまっているようである。しかし、臨床群においては、トラウマを解消する期待が子どもに向けられるだけでなく、親が経験してきたトラウマや剥奪感をそのまま子どもに経験させるという形での親子間役割の逆転あるいは世代間境

界の混乱が生じている。こういった拒絶的關係の背景には、親の側に羨望の感情が存在し、子どもはないがしろにされるという形で剝奪を経験し、羨望の感情を強めることになる。臨床群においては、このような形で、剝奪し・羨望する／剝奪され・羨望される親子關係が反復再演され、個人の内的世界に内在化されることとなる」。次に筆者は、在日コリアンの民族集団あるいは民族団体が、このような問題を抱える在日コリアンの家族に対して＜拡大家族＞の機能を果たしてきたことを確認した。そして、本研究で明らかになった問題は、黒人研究やホロコーストの心理学的影響に関する研究で明らかになっている問題と重なる点が見られたことを指摘し、在日コリアン研究を人種・民族差別や迫害とその心理学的影響という研究に位置づけていく必要があることを主張した。最後に、筆者は本研究の限界点として、データの偏りの問題と、横断的研究の問題を指摘し、より幅広いフィールドにおけるデータの収集と縦断的研究の必要性を指摘した。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、在日コリアンの心性の特徴を解明し、その特徴を喪失と差別の影響という観点から考察することを目的としている。この領域は、在日コリアンがこれまで置かれてきた苦難の状況からすれば、一日も早く本格的な研究がなされることが望ましかったにもかかわらず、さまざまな政治的、倫理的障壁のためにひどく立ち遅れてきた。著者は、民族学校におけるスクールカウンセリングという前例のないフィールドを一から果敢に開拓し、斬新な切り口から在日コリアンの抱えている問題の実態を明らかにするとともに、丁寧な心理臨床の実践を通して有効な対処を具体的に提示している。オリジナリティに富む労作と言える。

本論文は、民族学校における集団レベルでの参与観察と個人レベルでの事例研究、一般在日コリアンへのインタビュー調査、在日中高生と日本人中高生への質問紙調査など、5つの調査研究から成る。本論文では、まず民族学校がはたしている「拡大家族」としての機能が見出され、学級崩壊への対処においても個人療法においてもこの機能の支持と強化が重要であることが指摘されている。そして、そのような集団、個人に対する臨床経験の積み重ねのなかから、「日本社会においてシステム化された差別が、在日コリアンの家族内に剝奪と羨望の問題を内在化させ、剝奪し羨望する／剝奪され羨望される、というかたちで反復再演され、個人の内的世界に内在化される」という仮説が導き出された。著者は、臨床群に由来するこの仮説が健常群にも妥当であることをインタビュー調査で確認するとともに、在日コリアンの特徴的な親子關係がはたす役割を質問紙調査によって日本人と比較検討している。

本論文は、臨床心理学的な観点からなされた類を見ない現状報告として貴重であること、さらに社会、家族、個人の3項關係のなかで特有の心性が世代間連鎖を介して再生産されるメカニズムを解明したこと、この功績は大きい。のみならず、タビストック方式と呼ばれる乳児観察法を集団臨床場面に応用しその治療的効用を示したこともユニークであるし、民族学校のスクールカウンセリングにおいて見出された特徴的な病理に治療的介入を行うための技法的工夫も非常に実践的なものとして評価できる。

臨床心理学的な立場から体系的、重層的に緻密に分析されて得られた本論文における知見は、当該の心理臨床の場ですぐにでも効果的に応用できるだけでなく、在日コリアンという存在の今後の可能性を引き出す方途を模索するうえで貴重な示唆を与えている。以上より、本論文は、博士（人間科学）の学位論文として充分価値あるものと判断された。